

中国の詩人陳子昂の隱遁思想と日本の隱者

御船 明彦

東北公益文科大学総合研究論集第四十五号 抜刷

二〇二三年七月三十一日発行

中国の詩人陳子昂の隱遁思想と日本の隱者

御船 明彦

はじめに

陳子昂は初唐を代表する詩人の一人であり、一般には当時の彩麗美を競う表現主義の詩風に対し、漢魏の剛健な風骨を取り戻すことを主張し、次に来る詩の隆盛期である盛唐の礎を築いた詩人として評されている。^①

陳子昂は四川省の名家に生まれ、客觀的に見れば比較的順調に科擧に及第し、中国の歴史上ただ一人の女帝となった武則天の下で国政に関わったが、やがて官を辞して故郷に隱遁することとなった。たとえ在職期間中自分の思った通りの活動ができなかったとしても、同様の不満を抱いた官吏は中国史上他にも多数いたであろうし、周囲から見ればあまりに突然の引退であった。

本稿ではまず陳子昂の官吏としての生活と、隱遁を決意した背景に何があったかを考察した上で、日本の隱遁者の代表である鴨長明や兼好法師と比較することを通して、日中の隱遁思想の類似点と相違点について論考したい。

第一章 陳子昂の生涯

陳子昂の伝記としては、友人の盧藏用が書いた「陳子昂別伝」^②が『全唐文』に残っている。それによれば、陳子昂

は、字は伯玉、唐高宗の龍朔元年（661年）、梓州射洪県（現在の四川省射洪県）武東山の麓に生まれた。家は代々土地の豪族で、父の元敬は博学で人望があり、すぐれた人物として評判であった。飢饉で村人が死んだ時には、家の穀倉を開いて人々を救ったが、何の見返りも求めなかった。以来、魚や亀が淵に集まるが如く、遠近の人が彼を慕うようになったという。このような気質を受け継いだ子昂も、質実剛健、奇桀人に過ぎるものがあつた。若い頃は豪族の生まれということで遊侠の生活を送り、17、18歳になるまでまだ書物を知らなかった。ところがある時博徒たちに従つて郷学に入り、自分が無学であることを知ると慨然として志を立てて門客を謝絶し、数年にして經書史書万巻を讀破したという。

子昂21歳の時（681年）、初めて東に赴き咸京（長安）に入り太学に学ぶ。翌、高宗の永淳元年（682年）、科挙に応じたがこの時は及第しなかつた。翌年（683年）12月、高宗が薨じて中宗が即位する。さらに睿宗の文明元年（684年）、子昂は再び科挙を受験してこれに及第し、進士に挙げられた。時に子昂24歳の春であつたが、折しもこの年は、高宗の妃であつた武則天（その時はまだ皇后であつた）が自分の息子である中宗を廢して睿宗を即位させ、更に睿宗を別殿に退けて自ら年号を光宅と改め政治を執り始めたまさにその年であつた。さらにその年は、いよいよ決定的となった武氏一族の専横を憤った李敬業が謀反を企てた年でもある。このようにして子昂は武則天の朝政が始まつた不穏な空気の中で、官界へのスタートを切つたのである。

そして天授元年（690年）、武則天は遂に国号を周と改め、自ら正式に帝位について、年号を天授とし、以後中宗の神龍元年（705年）に武則天が崩ずるまで15年間、この武周政権は続くことになった。長壽2年（693年）、子昂が33歳の時に、天子側近の諫官である右拾遺（従八品上）を拝せられた。子昂はそれまでも武則天の政治について不満を持っていたが、この職につくともう一度朝政を正そうと、以前にも増して意見書を奉つては諫言した。しかしその意見書が採用されたことは一度もなかつた。

そして武攸宜の契丹討伐の翌年にあたる萬歲通天元年（696年）、老いた父への孝養を理由に辞職を願い出てそれが許され、彼は郷里に引き上げた。時に子昂37歳の秋のことであり、さらに父の死に遭ったのはそれから間もなくのことであった。父の喪に服した後、子昂は健康がすぐれなかったようであるが、その時子昂の家の財産に目を付けた県令段簡に拘禁された。家人は金二十万を贈ったが許されず、衰弱しきつた身を獄中に横たえながら、あえない最期を上げたという。陳子昂享年42歳、長安2年（702年）のことであった。

以上が、廬藏用による子昂の生涯の概略である。子昂が官僚としての生活を13年送った後、職を辞して故郷に隠遁したが、そうしようと決意するに至ったのはいつで、その理由は何だったか、先ずその詳細について考えてみたい。

第二章 陳子昂が隠遁した背景

「陳氏別伝」によれば、陳子昂の表向きの引退の理由は、病気の父親の孝養ということになっている。しかし官界に戻って来ようと思えば戻れたわけであり、それは一つのきっかけに過ぎない。事実、継母が亡くなった時には、3年の喪が明けた後に復帰し、右拾遺に転じたのである。従ってやはりもっと重要な理由があると考えるのが自然である。以下、その理由と考えられる事項について考察する。

一、君主としての武則天への不満

陳子昂が、比較的若くして政界から引退したことにはいくつかの理由が考えられるが、最も大きな原因は子昂が仕えた、時の権力者である武則天にあったであろう。言うまでもなく武則天は、中国の歴史上ただ一人の女帝となった人物であるが、権力を手中にするために権謀術数の限りを尽くしたことはよく知られている。彼女の立場を脅かす者は徹底

的に排除し、そして自分の身の安全のため身内を重用した。その点はまず指摘されるべきであろう。

しかし一方で武則天は、それまでの家柄や門閥にこだわらず、有能な人材を積極的に採用したことも知られている。前述のように子昂は睿宗の文明元年（684年）に進士に挙げられたが、その前年高宗が洛陽で薨じ、その靈柩を長安に移す旨の勅令が発せられた時、人民の疲弊ぶりを見て、早速それに反対するべく書（諫靈駕入京書）を奉った。しかし進士に及第したばかりで配属も決まっていない若者の上奏文を読んだ武則天は、腹を立てるところかその才を奇とし、麟臺正字を授けたのであった。それには子昂も感激したらしく、武則天が国号を周と変えた時には、武則天を寿ぐ文章まで作成してその期待に応えようとしている。

またこのような話もある。陳子昂が進士に及第したのと同じ年（684年）に、李敬業が武則天一族の専制に対して反乱を起こした。その檄文を書いたのは初唐の四傑の一人駱賓王であったが、武則天は自分の悪行が連ねてあるその文を見て、「此の如き才有るを用ひざるは宰相の過なり」と部下を叱ったという。基本的に武則天は文人、文才のある人間を好んだのである。従って、詩才、文才があり官僚として手腕を発揮しようとする子昂にとっては、必ずしも不遇であつたとは言えない。

しかしそうは言っても『新唐書』『旧唐書』『資治通鑑』などにおける武則天の評価は、極めて辛い。それには女性の皇帝に対する根本的な不快感がもととあつたかも知れないが、それよりは負けず嫌いの性格に加えて、やはり前述のように内政面において多くの人々を殺害し、時には残忍な仕打ちを下した理由が大きいであろう。しかも王皇后や蕭淑妃などのライバルに対しては、手足を切り落として塩漬けにするなど、とりわけ残酷であった。このように武則天の権力に対する執着心は相当なものであり、そのために密告政治を行い、罪も無い人々を次々に処刑し、密告した人物を取り立ていった。質実剛健の真つ直ぐな氣風を持った陳子昂としてはどうしてもそれを看過できず、「諫刑書」「諫政理書」「諫用刑書」など、多くの書を命がけで書き上げて奉って諫言したが、全く顧みられることはなかった。そうなる

と自分という存在に疑問を持たざるを得ず、陳子昂が職を辞したいと思ったことも首肯できるのである。

二、陳子昂の孤独感

初唐の詩人であり官僚でもあった陳子昂が、辞職するに到ったもう一つの理由として、子昂が常に孤独であったことが挙げられると思う。斯波六郎氏は『中国文学における孤独感』のなかで、「道をいだいて時世と合わなかった本当の隠者は、一体どんな日を送ったであろうか。それらの人々は、その周囲と隔絶された感じを持ち、そこに大なり小なり自己の孤独を感じることがあったのではないか。」^③と述べているが、陳子昂はまさに「道をいだいて時世と合わない」者である。従って子昂は常に孤独であったことは間違いない。

そして彼が孤独であったと言える最も明確な根拠は、子昂の代表作である「登幽州台歌」である。武則天の叔父にあたる建安王武攸宜が契丹討伐に出陣した時に、参謀として従軍した子昂が、武攸宜の用兵を諫めたことによって、軍曹に格下げされてしまった時に失意のうちに薊北楼に上って歌ったのが「登幽州台歌」だと盧藏用は言う。

登幽州台歌

幽州の台に登る歌

前不見古人

前に古人を見ず

後不見來者

後ろに來者を見ず

念天地之悠悠

天地の悠々たるを念ひ

独愴然而涕下

独り愴然として涕下る^④

ここで述べられているのは、この無限に広い「空間」の中で感じる孤独感だけでなく、過去にも未来にも、つまり無限に続く「時間」の中にも自分のことを理解してくれる人は誰もいないという、絶望的な孤独感である。

ここでは「登幽州台歌」について、考察してみたい。この詩は『唐詩選』では五言古詩に分類されているが、『唐詩

三百首』では七言古詩に分類されていることから分かる通り、一・二句目は五字で三・四句目は六字あって、正規の詩としての体裁を成していない。それはなぜであろうか。

この詩が歌われた時の事情について、廬藏用は前述の「陳子昂別伝」で次のように述べている。

他日又た諫を進む。言甚だ切至なり。建安之を謝絶す。乃ち署するに軍曹を以てす。子昂合わざるを知る。因りて
箝黙して列を下る。但だ掌書記を兼ねるのみ。薊北の楼に登るに因りて、昔の樂生燕昭の事に感じ、詩数首を賦す。
乃ち泫然として涙を流して歌ひて曰く、「前に古人を見ず、後ろに來者を見ず、天地の悠悠たるを念ひ、独り愴然
として涙下る」と。^⑤

ここには「他日又た諫を進む」とあるが、その時奉った書は「為建安王与遼東書」「為建安王答王尚書送生口書」「為建安王与諸将書」「為建安王与安東諸軍州書」「為建安王答王尚書書」などが残っており、その時の強い気持ちが見える。

この別伝にある、「登幽州台歌」に先んじて詠まれた詩数首とは、「薊丘覽古」七首と考えて間違いない。強い言葉で諫言したことによって、武攸宜に軍曹に格下げされ、傷心のうちに薊北楼に登って賦したのが「薊丘覽古」七首であり、それに続いてはらはらと涙を流しながら歌ったのがこの歌である。

では、この時の状況を考えるために「薊丘覽古」七首を見てみたい。つまり七首とは「軒轅台」から始まって、「燕昭王」「樂生」「燕太子」「田光先生」「鄒子」「郭隗」と、いずれも戦国時代の燕にゆかりの深い人物が6人続く。それらの作品は最後の一つを除いて、いずれも五言古詩で六句からなるという同じ形式で作られた作品群であるが、その七番目、つまり「登幽州台歌」の直前に賦されたことされる「郭隗」だけは四句しかない。しかもその「郭隗」を除く六首は、すべてその栄光を今は望むことはできないという感慨が最後に述べられる。試みにそれぞれ最後の二句を取り出してみると次のようになる。

「尚想ふ広成子、遺跡は白雲の隅にあり」(軒轅台)

「覇図悵として已みぬ、馬を駆りて復た帰り来る」（燕昭王）

「雄図竟に中天す、嘆を遺して阿衡に寄す」（楽生）

「其の事立たずと雖も、千載の傷心と為らん」（燕太子）

「劍を伏して誠に已みぬ、我を感じしめて涕衣を沾す」（田光先生）

「興亡已に千載、今や則ち推すもの無し」（鄒子）

彼らは第一首の「軒轅台」（「軒轅」とは三皇五帝の黄帝のことである）を除き、すべて燕という国に関わる人々であることはもちろんであるが、それぞれ一時野望を抱き、自分の理想を追い求め、そして死んで行った点で共通しており、今は彼らの面影を求めても得られないという悲しみが全体の基調になっている。

ところで「薊丘覽古」は連作であるはずなのに、最後の一首「郭隗」のみ体裁が他と異なるのはなぜか。それは子昂の気持ち詩を一つ一つ賦すうちに次第に昂ぶってきたからである。それが七番目にはその形式が前の詩と体裁が違い、そして八番目の「登幽州台歌」にきた時には、その古詩の体裁すら成さなくなったというのが理由の一つである

そしてもう一つは、「郭隗」に対する子昂の意識である。試しに連作中の第三首「楽生」と比較してみることにする。

楽生

王道已淪昧

王道已に淪昧し

戦国競貪兵

戦国競ひて兵を貪る

楽生何感激

楽生何にか感激して

仗義下齊城

義に仗りて齊城を下す

雄図竟中天

雄図竟に中天し

遺嘆寄阿衡

嘆を遺して阿衡に寄す^⑥

樂生とは燕の樂毅將軍のことであるが、古代の王道は已に無い戦国時代、「樂生何にか感激して」とあるが、實際は燕昭王の器の大きな人間性に感激したのである。そして昭王の辱を雪ぐために齊を伐ったのであるが、そのことを「義に仗りて」と言っている。そしてすでに述べたように、最後に天下を獲るといふ野望は半ばで挫折してしまったことを嘆く。阿衡とは殷の湯王を助けて夏の紂王を討った伊尹のことで、樂毅を喩えた表現である。またここに使われている「義」や「雄図」を持った人間は、ここまでの六首の連作に共通する子昂自身が理想とする人間像であり、すべて五言六句の形式で作られている。

しかし、第七首の「郭隗」はそれらと聊か趣を異にする。郭隗は言うまでも無く、「隗より始めよ」と言つて昭王にうまく自分を売り込んだ人物であるが、それは次のように述べられる。

郭隗

逢時独為貴 時に逢ひて独り貴と為る

歷代非無才 歷代才無きに非らず

隗君亦何幸 隗君亦何ぞ幸ひなる

遂起黄金台 遂に起つ黄金台^⑦

前述のようにこの詩は形の上からも四句しかなく、前の六首が六句あつたのとは明らかに異なっているのであるが、それだけでなく内容からも前作までとは違いが見られる。樂生については、「義に仗りて齊城を下す」と言っているが、郭隗については、「時に逢いて独り貴と為る」という、つまり郭隗が歴史に名を残しているのはあくまでも「時節に合ったから」というのである。さらに続けて才が無かつたわけではないのだが、「幸い」があつたと述べる。そしてその幸いのおかげで「黄金台に起つ」ことができたと結ぶ。そこには中国を統一しようという雄図もないし、また感激して義を行った事実もない。ただ燕に生まれて昭王という名君に仕えるという幸運によって手腕を発揮できただけのこと

だというのが、子昂の評価なのである。そしてここまで歌った時にふと気がつくのは自らの不遇であった。つまり自分が仕えている武則天は、国民の安寧を考えているどころか、常に権力闘争に明け暮れている。自分も燕の昭王のようなスケールの大きな志を持った正しい君主の下で、精一杯働きたいの思いだったのである。そこまで考えると、郭隗の詩に最後の二句、つまり「今ではその姿を望むことはできない」という内容になるはずの言葉を、その後に付け加えることはできなかった。

君主は臣下を選ぶことができるが、臣下は君主を選ぶことができない。陳子昂は一官吏として次第に武則天に失望していくが、しかしやがてその失望は、仕えて讒言したり金で自分の地位を買ったりする役人たち、更にはごさかしい知恵を働かせて他人をだまし、自分の利を肥やす一般の市人たち、乃ち彼を取り巻くあらゆる世俗に対して不満を抱くようになる。その結果「道をいだいて時世と合わなかった」陳子昂の孤独感は、言葉では表現できないほど大きくなったのである。

三、兼済と独善

もう一つ、子昂の身の処し方について述べたいと思う。「登幽州台歌」が歌われた時の事情について、武攸宜に軍曹に格下げされた場面で、盧藏用は、「子昂合わざるを知る。因りて箝黙して列を下る。但だ掌書記を兼ねるのみ」、つまり黙ってその場を引き下がったという。そして幽州台で「薊丘覽古」を賦し「登幽州台歌」を泫然として涙を流しながら歌った後も、彼はまた軍に戻り、黙々と新しい任務をこなしたのである。それができたのは兼済と独善の考え方、つまり自分が用いられた時には天下のために全力で働くが、自分が用いられない時には、自分自身を正しく修めるという精神ではないかと思われる。子昂の「同宋參軍之問夢趙六贈盧陳二子之作」に、次のようにある。

達則兼済天下

達すれば則ち兼ねて天下を済む

窮則独善其時

窮すれば則ち独り其の時を善くす^⑧

これは『孟子』『尽心』に述べられる精神であるが、『論語』にも「之を用いれば則ち行ひ、之を捨つれば則ち蔵る」（「述而」）、「天下に道有れば則ち見え、道無ければ則ち隠る」（「泰伯」）などと見られるように、独善と兼濟とは伝統的な知識人の身の処し方の一つとされていた。

先に述べたように、時節に合った郭隗を心では羨望しながらも、他の英雄たちと同じように時節に合わなかった自分は、潔く退くのが大丈夫の身の処し方であると考えたのである。

四、隱遁へのあこがれ

陳子昂の代表作と言われる作品には、「登幽州台歌」と並んで「感遇三十八首」がある。それは子昂が心に抱いた折々の感慨を都度書き留めたものとされているが、そこには自分と同じような境遇にあつて、潔く身を引いた隱者が何人か登場する。感遇十八には、次のように云う。

逶迤勢已久

逶迤として勢ひ已に久しく

骨鯁道斯窮

骨鯁道斯に窮まれり

豈無感激者

豈に感激する者無からんや

時俗類此風

時俗此の風を類る

灌園何其鄙

灌園何ぞ其れ鄙なる

皎皎於陵子

皎皎たり於陵子

世道不相入

世道相入れず

嗟嗟張長公

嗟嗟 張長子^⑨

ここに言う「於陵子」とは、『孟子』『滕文公』に孟子と匡章との会話の中に登場する齊の陳仲子のことで、不義の兄を嫌って於陵に隠れた人物であり、「張長子」とは、漢の張釋子の子である張摯のことで、彼は曲がった世に取り込まれるのを嫌って終身官に仕えなかった。ともに子昂が理想とする隠者で、彼らが世に受け入れられなかったことを嘆いている。そしてそれは自分自身と完全に重なる存在であり、そこには密かに引退の意向が述べられていることは間違いない。

第三章 中国の隠者「陳子昂」と日本の隠者「鴨長明」との比較

中国では古代より歴史をたどれば、隠者といわれる人は数え切れないほどたくさんいる。また日本にも数は多くないとしても、幾人かは存在する。もちろん中国と日本の隠者を同じ次元で語るわけにはいかないが、敢えて陳子昂と日本の隠者との比較を試みたい。日本の隠者と言えば、代表的な人物は鎌倉時代に生きた鴨長明と兼好法師であろう。ここでは、山にこもって生活した典型的な隠者として鴨長明と比較してみることにする。あくまでも彼を通して日中の文化の相違を明らかにする一つの足がかりとするためである。

一、鴨長明の生涯

鴨長明は、久寿2年（1155年）、京都下鴨神社に生まれた。当時下鴨神社は権勢を誇っており、朝廷も一目おく存在であった。しかも長明の父長継はその下鴨神社の正禰宜惣官という最高位にいた人物で、長明は幼い頃から父の後を継ぐために、学問に取り組み英才教育を受け、七歳にして早くも従五位下に叙せられたが、それはもちろん父の威光によるものである。しかし長明が19歳の時に父が病氣のため急死し、後ろ盾を失い、父の地位を親戚の子どもに奪わ

れてしまった。彼はやがて人生の目的を見失い、敷地内の修学院にこもって一人暮らしを始める。そして32歳頃から寺の行事や催し物にはほとんど参加しなくなり、専ら和歌を作り、琵琶や笛などの管弦に没頭して日々を過ごすようになった。

ところが文治3年(1187年)『千載和歌集』に一首入選すると、以後宮廷の歌合わせにも参加するようになり、建仁元年(1201年)、47歳の時、時の権力者である後鳥羽上皇より、勅撰和歌集を編纂する和歌所の寄人にえられ、そこでその才を認められ、欠員となった河合神社の欄宜に推薦されることとなった。長明は大いに喜んだというが、しかしまたもや当時鴨神社の惣官となっていた親戚でもある鴨祐兼からの猛烈な横やりが入り、一転その話はなかったことになってしまった。そのことは長明にとって精神的に大きな打撃となり、元久元年(1204年)、49歳で出家して大原に通世し、その後日野山に籠もり、そこに方丈(約9平方メートル)の庵を結んで隠棲することとなった。

その後、56歳の時歌論書である『無名抄』が成立、57歳で代表作である随筆『方丈記』、説話集『発心集』を著した。そして61歳で亡くなっている。

二、両者の共通点

(1) 隠棲するまで

中国初唐の詩人である陳子昂と、日本の平安時代から鎌倉時代にかけて生き、『方丈記』を書いた鴨長明とを比較することはもとより無理があると承知の上で、まずは二人の人生に共通するところはないか考察してみると、実は共通点が非常に多いことに気がつく。

まず一つは、二人とも名家の生まれであることである。「陳子昂別伝」によれば子昂の家は代々の豪族であり、父の元敬も度量のある才氣すぐれた人物で、地元の人々の尊敬を集めていたという。一方鴨長明の父も、京都下鴨神社の欄

宜の家柄で、父はその最高者である正禰宜惣官であった。

第二は、二人とも若い頃は放蕩していたことである。子昂は十七八歳まで書を読まず、俠氣に任せて振る舞っていたとある。長明もまた十九歳で父を亡くして以後は、神社の一角に住みながらも神社の行事には出ることも無く、毎日和歌と管弦の生活に明け暮れている。

第三は、時の国家第一の権力者に見出されて自らの力を発揮するチャンスを得、そして挫折したことである。子昂は中国史上ただ一人の女帝となる「武皇后（後の武則天）」に仕え、結果的に挫折し故郷に隠遁することとなった。長明も時の権力者である「後鳥羽上皇」に見出されて、勅撰和歌集の和歌所の寄人に抜擢され、本人もその能力を発揮して河合神社の次期禰宜に推薦されたが、それがだめになったことで心が折れ、出家した上で日野山に庵を建てて隠棲することとなった。

以上のことを考えると、この二人は生まれてから隠遁に続く道が全くと云っていいほど酷似している。しかしこれは偶然ではなく、隠遁に至るという一つのパターンが、日中に関係なく存在するのもかもしれない。

（2）隠棲後の生活

隠遁後に二人はそれぞれ何をしたか。とりあえず鴨長明については『方丈記』に詳しく書いてあるので、はつきりしている。彼は日野山に籠もった後に著作を著している。それは歌論書の『無名抄』、説話集の『発心集』そして彼の代表作である随筆の『方丈記』である。皮肉なことに彼が隠遁した翌年、彼も編纂に関わったであろう『新古今和歌集』が完成し、長明の歌は十首入集している。12年間の隠遁生活中に、鎌倉の将軍源実朝に会いにも行っているが、用向きは和歌についてであると考えられ、その直後に『無名抄』を発表しているが、実にアクティブな生活と言える。

一方陳子昂の隠遁後はどうであるか。彼は隠遁して故郷に帰ると間もなく父の死に遭い、喪に服したが、健康にすぐ

れない状態が続いていたようである。ではもともと隱棲後のビジョンは何も無かったのかというと、そうではない。乃ち帰郷した前後の事績を「陳子昂別伝」には云う、

嘗て国史の蕪雜なるを恨む。乃ち漢の孝武の後より唐に迄るまでを以て、後史記と為す。綱紀粗ば立ち、筆削未だ終わらざるに、文林府君の憂に鍾たり、其の書廢す。^⑩

この記事によれば、子昂は以前から「国史」がきちんと整理されていないことを残念がっており、漢の孝武の後から唐に至るまでを「後史記」として書くようとしていた。そしてその大まかな目次もほぼ立てていたが、文林府君とは父元敬のことと思われるが、その父の喪に遭って中断してしまったという。ここに述べられている「後史記」という名称からして、当然司馬遷に続こうとしたのである。陳子昂の場合は、県令段簡のために投獄され殺害されるという想定していなかった事態のため完成はしなかったが、それがなければ当然その完成のために取り組んでいたはずである。

以上のことをみて来ると、陳子昂と鴨長明については、隱遁後の生活についても共通点を見出すことができる。

(3) 二人が生きた社会背景

陳子昂と鴨長明は、国も時代も全く異なる人であるからその社会情勢を一概に較べることはできないが、少なくとも社会の動乱期であることは共通している。しかもそれは、従来からの価値観の大きな転換期でもある。

唐の初め、太宗李世民的貞観年間、貞観の治と呼ばれる太平の時代であったが、次の高宗の時代になると、その妃であった武照（後の武則天）が皇后となって次第に権力を恣にし、ついには自ら初めての女性皇帝となって国号を周に替える、いわゆる「武周革命」である。この混乱は武則天が亡くなる長安4年（704年）まで続くが、子昂はその2年前、つまりその混乱が収まる前に亡くなっている。

一方鴨長明が生きた平安末から鎌倉初めは、さらに大きな激動期である。貴族政権が没落し武士が力を蓄え、権勢を

誇った平家が滅亡し、さらに鎌倉に初の武士政権である幕府が誕生する。それに加えて『方丈記』には、火災や竜巻、飢饉、大地震などの災害が相次ぎ、人々が次々に死んで行く様が詳細に描かれており、人々は仏の教えにすがり、「無常観」と呼ばれる思想が世を覆っていた。日本の歴史上、それほど短期間に大きく価値観が変わった時代はないと言える。

この二人が乱世に生きたという社会背景においても、やはり共通しているのである。

(4) 陳子昂の「神仙思想」と鴨長明の「無常観」

「陳子昂別伝」に、次のような部分がある。

子昂、晩に黄老の言を愛し、尤も易の象を耽味し、往往精詣す。^⑪

ここで云う「黄老の言」とは、老子の言葉であろう。また別伝の子昂が亡くなった場面は、次のように記されている。

自ら氣力を度るに、恐らくは全きこと能わず。因りて著に命じて自ら筮す。卦成る。仰ぎて号して曰く、「天命祐けず、吾其れ死せん。」と。是に於いて遂に絶つ。年四十二。^⑫

「著」とは、占いに使う竹の細い棒のことであり、死の直前に氣力も衰えた自分の行く末を占ってみたのであるが、意外にもそれが指し示したものは死だったのである。

しかしここで述べたいのは易ではなく、「神仙」についてである。感遇三十八首には、厳しい現実から逃れる手段としての「仙人」が幾人か登場する。

曷ぞ見ん玄眞子、世を玉壺の中に見る（同五）^⑬ 玄眞子とは壺公のこと。

飛び飛びて騎羊子、胡ぞ乃ち蛾眉に在る（同三十三）^⑭ 騎羊子とは葛由のこと。

念ひて楚狂子と与に、悠悠と白雲に期せん（同三十六）^⑮ 楚狂子とは楚狂與のこと。

特にこの中の葛由と楚狂與は、子昂の故郷である峨眉山に住んでいたということで、近親感を持っていることが窺える。なお「白雲」は仙界を象徴するものであり、感遇の中でも度々使用される。つまり身の回りで人がどんどん肅正されていく不安定な時代は、その予先がいつ自分に向いて来るかもしれない危険な時代でもあり、老莊思想、神仙思想はそんな時代に精神を安定させる心の拠り所、あるいは逃避願望を満たす場所だったのである。

しかし「眷然として幽褐を顧み、白雲空しく涕淚す」（同三十三）のように、仙界はあくまでも厳しい現実から逃れるためのあこがれの間であって、実際には現実から救ってくれるものではないことを、実は子昂自身も自覚している。

一方平安末から鎌倉初期にかけての、日本史上まれに見る激動の時代に世に処する精神、日本の思想は「無常観」であつた。「無常観」とは、この世の物や現象は留まることなく、常に移り変わっていくという見方であるが、そこから人の命ははかなく、世の中は頼りないものであるという觀念に結びつく。冒頭「ゆく河の流れは絶えずして、しかもとの水にあらず。」で始まる鴨長明の『方丈記』は、古来平家物語と並んで、日本の無常観を著した文学の代表とされているが、実は長明は自分自身に改めてそれを言い聞かせているのである。

無常の觀念が広まったのには、平安末期の末法思想と浄土信仰が関係しているといわれる。末法思想とは、釈迦の入寂後にその教えが徐々に忘れられ、やがて廢れる時代がやって来るという考えで、その不安から人々を救おうと、鎌倉初期には新しい仏教の教えが次々と興つた。そして人々は苦しい現世から救われるために、ひたすら来世での極楽往生を願つたのである。そのような世の風潮を、神社の禰宜の子として生まれ、若い頃は神社を継ぐべく修行に励み、49歳になってから仏門に出家した長明は直接肌で感じていたはずである。彼が仏にすがり、無常観によって自らを救おうとしたことは自然なことであつた。

しかし方丈記では、最後にいう、

みづから心に問ひていはく、世をのがれて山林にまじはるは、心をさめて道を行はむとなり。しかるを、汝姿は

聖人にて、心は濁りに染めり。(中略) その時心更に答ふる事なし。只かたはらに舌根をやとひて、不請阿弥陀仏、
両三遍してやみぬ。¹⁶⁾

一転して、その方丈の生活にさえ疑問を抱かざるを得ないことを告白し、その矛盾に対して回答できないことを見出し、最後には黙ってしまうのである。

陳子昂が現実からの逃避として「神仙思想」に逃れようとしたが、逃れられないことを自覚していたのと全く同じく、鴨長明も「無常観」に救いを求めようとするのだが、それによって救われることはできないと自覚している。この両者には共通点が多いと指摘してきたが、この境地こそ最大の共通部分であると言える。なぜなら、この境地は日本と中国に生まれ育った二人がたどり着いた、最終的な境地だからである。救いを求める気持ち、救われたいという気持ちは、日本、中国のいずれの国であるかを問わず、また時代がいつであるかを問わず、共通しているといえそうである。

第四章 中国の隠者と日本の隠者

本稿はここまで、隠者という言葉は何度も使ってきた。一般に隠者とは山に籠もる世捨て人を連想させるが、実は陳子昂は職を辞して故郷に帰ってきたが、山に籠もったわけではない。一方鴨長明の方は、都にほど近い日野山に小さな庵を立て、そこに籠もって一人で暮らしている。ところが二人のたどった道は、これまで述べてきたように驚くほど似ている。

それでは、一口に隠者と呼ばれる人々には、どのような種類やパターンがあるであろうか、考えてみたい。

一、中国の隠者「陳子昂」と日本の隠者「鴨長明」

古来、中国には数え切れないほど数多くの隠者が存在しており、そのパターンも動機も実に様々である。井波律子氏は『中国の隠者』の中で、中国で最も古い隠者は、五帝の一人堯に後継者になってくれと頼まれた許由であるとする。そこでの許由は堯の申し出を拒否したばかりか、汚らわしいことを聞いたと潁水の流れて耳を洗ったと言われているが、あまりにも古い話で確たる資料も存在しないことから、実際に許由という人が存在したかどうかは分からないとしている。^⑪

また司馬遷は史記の中で、伯夷・叔斉について次のように述べている。伯夷と叔斉は、元々殷王朝の末期、孤竹という小さな国の君主の子として生まれたが、二人は君主の座に就くことを承知せず、二番目の兄弟に譲って周に逃げた。しかし周の武王は父の葬式もすんでいないのに、早くも殷の天子紂を討伐すべく出陣するところだった。やがて武王は殷を滅ぼし、周王朝を立てたが、伯夷と叔斉兄弟は周には仕えようとせず、首陽山に籠もって蕨を食べ、間もなく餓死してしまう。司馬遷も「天道は是か非か」と言っているが、同じく隠者とは言ってもこのほほんと楽しく暮らした許由とは異なり、ここには禁欲的で真剣な隠者像がある。

これらの例を挙げた上で、井波氏は中国古代の隠者像には二種類あると指摘している。一つは、許由に象徴される、何事にも束縛されない生活を楽しもうとする「自由志向型」の隠者、もう一つは、伯夷・叔斉に象徴される、緊急避難的に隠者の道を選び、わが身を律し続けようとする「禁欲型」の隠者である。^⑫ただし、どちらにしても現実の社会や政治に違和感を感じ、そこから身を引き離そうとする点では、深く通底するものがあると指摘している。

先に隠者としての陳子昂と鴨長明には驚くほど似たところがあると指摘したが、それはこの分析に合致する。つまり子昂も長明も間違いなく緊急避難的に隠者の道を選び、しかもその心の底流には、現実の社会や政治への違和感があったことも間違いない。いや違和感などという弱いものではなく、それは拒絶感とも言えるほど強いものであった。

二、もう一つの分類

前項では、井波律子氏による、自由志向型と禁欲型という中国の隠者の二つの分類を紹介したが、もう一つ斯波六郎氏は『中国文学における孤独感』の中で、中国の隠者を別の観点で二つに分類している。斯波氏は云う、

隠者といえは、普通は、世を避けて仕進を求めない人、いわゆる「世捨て人」だけを指すようであるが、もう一つの隠者がある。すなわち理想を抱きながらも隠没して顕れなかった人、そういう人をも隠者として考えるべきであろう。¹⁹⁾

そしてこの2つのうち前者を「世を避けて隠れた型」、後者を「世を避けないで隠された型」としている。さらに「世を避けないで隠された型」の説明として、時命が非なる故に、その身はそのまま世にありて発言しながらも、認められないで埋もれた人としている。この観点からすれば、陳子昂は「世を避けないで隠された型」に属し、鴨長明は「世を避けて隠れた型」に属す。この二人には多くの共通点が認められたが、斯波氏の分類に従えば、陳子昂と鴨長明は別々の型ということになる。

三、中国の隠者「陳子昂」と日本の隠者「兼好法師」

本稿ではここに、もう一人の日本の隠者を挙げたい。彼は「世を避けて隠れて」もないし、「世を避けないで隠されて」もない。それは『徒然草』の筆者である「兼好法師」である。そこで私は、斯波氏の二つ型に加えてもう一つ別の型を提起したい。それは「世を避けないで隠れもしない型」の隠者である。兼好は長明と並んで日本を代表する隠者と言われるが、どこにも隠れていない。兼好は長明に70年ほど後れて、京都の吉田神社の社務職である卜部家に生まれたが、長明のような名門ではない。二十代の頃に宮廷に出仕して貴族たちと交わりを深め、三十代で出家したが、その理由はよく分かっていない。四十代頃から二条派の歌人として活躍し、二条為世門下の四天王と呼ばれた。ただ彼

は現実社会とほどよい関係を保ちながら、世相と人間を観察し、『枕草子』『方丈記』と並び三大随筆と言われている『徒然草』を書いたのである。彼は「世を避けてもせず隠れもしない」で、都の片隅に住んで、発信していたのである。その意味で、「世を避けて隠れた」鴨長明とも違うし、「世を避けてなかったが隠された」陳子昂とも違っている。

このように「世を避けないで隠れもしない型」の隠者は、中国の歴史上にもかなりいる。「婦りなん、いざ」「盧を結びて人境に在り」の陶淵明、「竹溪の六逸」「謫仙人」と呼ばれた李白などの名前が浮かぶが、その中でも詳細は省くが前漢の武帝に仕えた「滑稽」の東方朔などは、その典型と言えるであろう。

このように隠者にはいくつかの型が存在するが、それでは共通するところは何かであろうか。それは井波氏の言を借りれば、現実の社会や政治に違和感を感じ、そこから身を引き離そうとする点になるであろうが、さらに言えば、陳子昂も鴨長明も兼好法師も、そしてすべての隠者が自分の信念や価値観に忠実に生きようとしていることが、その根底にあると思われる。

おわりに

陳子昂は、初唐という時代にあつて、専ら表現の美しさのみを求める当時の詩風に反対して、漢魏の風骨ある詩風を取り戻すべきと主張した初唐の詩人として高く評価されている。彼の代表作である感遇三十八首は、阮籍の詠懷八十二首の影響を受けており、そしてそれが李白の古風五十九首に影響を与えたことは周知の通りである。

しかし今回は詩壇の革新者という視点つまり詩人としての陳子昂ではなく、若くして隠遁した人物として、日本の隠者である鴨長明との比較を試みることにした。もちろん生きた国も時代も文化も社会も何もかも異なるこの二人ではあるが、それでも共通点が多いのは意外であった。しかしそれは人が自分の信念に忠実に生きるという営みが、国も時代

も関係なく普遍的なものであることの証明とも言える。今後も聖域を設けず、中国と日本を様々な分野で比較検討して行きたい。

注..

- ①『新唐書』『陳子昂伝』に「唐興り、文章、徐庾の余風を受け天下祖尚するに、子昂始めて雅正に転ず」とある。『二十五史』6『新唐書』『陳子昂伝』（上海書店、1986年12月）、四一七頁。
- ②『全唐文』巻238「陳子昂別伝」（上海古籍出版社、1990年12月）、一〇六五頁
- ③斯波六郎著『中国文学における孤独感』（岩波文庫、1999年7月）、二二頁
- ④彭慶生校注『陳子昂校注』（黄山書社、2013年3月）、二六九頁
- ⑤『全唐文』『陳子昂別伝』
- ⑥彭慶生校注『陳子昂校注』（黄山書社、2013年3月）、二五九頁
- ⑦同書、二六七頁
- ⑧同書、三四四頁
- ⑨同書、八四頁
- ⑩『全唐文』『陳子昂別伝』
- ⑪同前
- ⑫同前
- ⑬彭慶生校注『陳子昂校注』（黄山書社、2013年3月）、三八頁

⑭ 同書、一三〇頁

⑮ 同書、一四〇頁

⑯ 市古貞次校注『新訂方丈記』（岩波文庫、1989年5月）、三九頁

⑰ 井波律子『中国の隠者』（文春新書、2001年3月）、八頁

⑱ 同書、一三頁

⑲ 斯波六郎著『中国文学における孤独感』（岩波文庫、1999年7月）、十一頁